

第49回日本輸血学会総会

小堀 正雄*

日本輸血学会はすでに49回で、日本麻酔科学会より1年先輩にあたる。もちろん日本医学会総会の分科会にも属しており、歴史の重みを感じさせる学会である。さる2001年5月31日から3日間にわたり東京新宿の京王プラザホテルで第49回日本輸血学会総会が開催された。慶応義塾大学医学部内科の池田康夫総会長の下に各種の趣向を凝らしながら行われた。本総会のテーマの「輸血医学の Identity と Harmonization」が示すとおり、輸血学会の領域と臨床との関わりをおおいに意識させる内容であった。また、輸血領域は他の学会に比べ行政的、国家的な側面が強く、これに関する規制が多い分野である。そのため、総会長シンポジウムでは、「輸血医学／輸血医療の将来像：国家的観点からの提言」と題して、わが国の日赤や厚生労働省の事情だけでなく、米国の乱立気味の組織事情、さらに多数の国家を抱える欧州の事情などが紹介された。輸血行政ひとつをとってみても地域的な統一は経済性、意識性、歴史性などに阻まれてまだまだとの感があった。また、ミレニアム・シンポジウムとして「輸血医学と再生医療」があり、21世紀を意識した内容であった。従来の麻酔科医などが輸血に対して持っている印象とかなりかけ離れたところまで学会が進んできたような印象を持った。その他、シンポジウム3題、スポンサー・シンポジウム(?)2題あり活発な討論がみられた。

ともすると輸血の話題は臨床との関わりとは別の次元で論じられる傾向があったが、やはり臨床との関わりを持ちながら輸血を考えることが急務であるとの総会長の認識の下で、臨床レビューとして、「輸血治療とEBM：エビデンスのレベルを

レビューする」と題し、医学教育、赤血球輸血、血小板輸血、アルブミン製剤など興味ある内容が講演され、2時間30分があつという間であった。臨床的な関わりを本学会が常に意識しなければならない事情として、本学会の参加者の多くが臨床現場に接することのない臨床検査技師である点が上げられよう。臨床があつての輸血療法なのである。また、本学会の優秀な点は教育プログラムの充実である。一項目30分であるが技師向けプログラム6題、トピックス6題、臨床updateシリーズ3題とまさに至れり尽くせりなのである。実際はこれだけで済まず、認定輸血検査技師が資格更新するにあたり2時間30分の受講が用意されており、輸血学会認定医を受験する人に対する講習会まで開かれている。ここまでであると物見遊山で学会に出席するのが申し訳なく感じるほどである。会場は医師が中心に行っている学会と異なり、前の席から順に埋まって行き異常なほどの熱意に圧倒される。1日目ではナイトセミナーとして夜8時まで行われていたそうである。演者に聞いたところ、臨床系の学会にありそうなその後の懇親会は予定されていなかったとのことであった。筆者も演者のひとりとして参加したが「コンセンサスカンファレンス」という趣向が凝らされた試みがあった。本学会では初めてということであった。これは、血液型や、交差試験のあり方をどこまで検査をしてよしとするのかをあらかじめ用意してあった4項目について会場の挙手などを行いながら3時間以上の長丁場で次々に決定して行く趣向である。問題の先送りは許されず、時間内に結論を絶対に出すとの意気込みで行われた。輸血全国調査報告が厚生労働省の調査機関からの報告がある点などは輸血の行政的関わりへの深さを感じさせられた。さらに輸血学会の各種の委員会の報告が

*昭和大学医学部麻酔科学教室

会場で発表され、評議員会の議事録を読まなくても学会の動きがある程度分かる仕組みである。ここまで書くと一般演題が心配になるが、今年は209題あり、優秀な30題が口演、残りがポスターとなった。ポスターは座長がいなくて、時間内での自由討論であったがここでも活発な意見交換が行われていた。しかし、発表者にリボンなどが手渡されていなかったため、質問相手を探すのに難渋した。例年までは一般演題は全て口演+ポスターであったが、3会場で盛り沢山の内容では仕方がないところか。学会2日目の総会時には出席者は1,500人を越えていることが報告された。

本年の輸血学会は都心のホテルで行われたこと

もあってか、会場のまとまりも抜群で場所も最高であった。会場費も前納なら8,000円と3日間であることを考えると安く、ランチオン・セミナーも充実していた。学会出席者の多くは若い女性であり、麻酔科学会などで通常みられる背広がいっぱいの風景より華やかに感じられるのは私一人ではなかったと思う。麻酔科などで日常輸血に携わっている人達にもぜひ出席して頂きたい学会と思われた。ちなみに私が知っている麻酔科医の先生には会期中わずか2名にあっていただけだったのは残念であった。来年は2002年5月8～10日、日本都市センター会館・砂防会館で柴田洋一東京大学病院輸血部教授の下に開催される予定である。